〔論文〕

小倉襄二の〈対象論〉に関する考察

石井 洗二*

―― 目 次 ――

1．はじめに
2．1950年代の対象論
3．対象論の展開
4．おわりに

キーワード：社会福祉理論、疎外論、共同体

1．はじめに

本稿の目的は、小倉襄二の対象論の推移をたどり、その独自性を確認することにある。具体的には、1963年に発表された疎外論にもとづく対象論研究をひとつの区切りとして位置づけ、そこにいたる歩みと、その後の展開を考察する。

小倉襄二の研究スタイルについて、永岡正己はつぎのように記している。

> その道程は、彫刻を刻み出すようなスタイルから、たとえばセザンヌのサント・ビクトワール山のように、光と影と書かざる部分によって本質に迫るような歩みに次第に変わっていった。それは社会福祉の形式論理からは明らかにならない質のものであった。そこに先生の戦後社会福祉研究史における位

＊ Senji ISHII　本学社会福祉学部助教授（社会福祉学科）

置があり、断念を内包した果実があるのだと思う。（永岡正己1998：143）

本稿の考察は、この「断念を内包した果実」というイメージに導かれて進められていく。いわば、小倉の社会福祉研究に実った「断念を内包した果実」を筆者なりに探り当てようとする試みである。

小倉の論考は多岐にわたる。おもな著書だけでも、『公的扶助』（ミネルヴァ書房、1962年）、『社会保障と社会問題』（汐文社、1968年）、『社会保障と人権』（汐文社、1970年）、『老後保障の構図』（汐文社、1971年）、『市民福祉の設計』（小学館、1976年）、『社会状況としての福祉』（法律文化社、1981年）、『市民福祉の政策と思想』（世界思想社、1983年）、『福祉の深層』（法律文化社、1996年）などがある。これら研究活動を全般的に見渡すことは、筆者の能力を超える。本稿では、それらの中からとくに「対象論」に考察の焦点を絞っている。対象論は、小倉の研究活動の出発点であり、また、「福祉研究は究極の処、〈対象論研究〉にたちかえる外ない」（小倉襄二1996：309）とあるように、現在においても小倉の研究活動を貫いているテーマである。

本稿は、小倉の対象論に論評を加えることをめざしているのではない。竹中勝男、嶋田啓一郎の社会福祉理論を検討した前二稿（石井洗二2003、石井洗二2004）と同様に、筆者の意図は、先達の理論形成の過程から継ぐべきことを学びとる、ということにある。前二稿では社会福祉理論において人間の共同性を位置づけることがいかにして可能であるか、という点に焦点をあてて考察をおこなったが、本稿では、社会福祉理論において〈共同体〉概念を位置づけるに際しての基本的な視座を獲得することをめざして考察がすすめられる。

２．1950年代の対象論

小倉は、同志社大学在学中に、竹中勝男が所長をつとめる京都の社会福祉研究所で「助手、研究調査の仕事」（小倉襄二2005：６）に従事した。その成果は、1949年11月『街娼―実態とその手記』（竹中勝男・住谷悦治編、有恒社）として刊行されている。当時の小倉は「ジャーナリスト（とくに新聞記者）」を志していたが、ここでの調査の経験と、竹中勝男、住谷悦治両氏の「つよいおすすめ」によって（小倉襄二2005：６－７）、1950年４月同志社大学助手に就いた。

この当時の小倉の論考のうち、対象論とかかわりの深いものとして、本節では次のものをとりあげる。

「書評・竹中勝男教授「社会福祉研究」附―社会福祉の現実的限界について」（小倉襄二1951）

「社会事業の客体領域について」（小倉襄二1952）

「社会事業基礎理論の焦点」（小倉襄二1952②）

「社会事業の対象について―対象の位置」（小倉襄二1953）

「社会事業対象論と従事者の態度」（小倉襄二1953②）

「「窮乏」の現実態について―公的扶助と低所得階層」（小倉襄二1957）

「「社会福祉対象論」の構成―「疎外論」によるノート」（小倉襄二1963）

同志社大学に着任後、最初に書かれた論考は、自身の指導教員である竹中勝男が前年１月に上梓した『社会福祉研究』（関書院、1950年）の書評であった。[(1)] 末尾に、1950年８月30日稿、と記されており、小倉が23歳のときである。このなかで小倉は、同書の内容を紹介したうえで、副題にあるように、「社会福祉の現実的限界について」の考察を付け加えている。付論をくわえた理由は、次のような思いにあった。

> 教授の「社会福祉」によって統整的な概念―視点と問題設定を得たわれわれは再び現実に還るとき、その混沌を整序しうると共に、一つの現実的な限界をも発見し更に高次の可能性の領域を望まねばならなくなる。ローザ・ルクセンブルグの描いてみせた矛盾―悪循環を断絶することがそれである。（小倉襄二1951：186）

「ローザ・ルクセンブルグの描いてみせた矛盾―悪循環」とは、この直前に引用されていた資本蓄積―窮乏化法則に関する叙述を指す。つまり、「社会福祉の現実的限界」として資本蓄積―窮乏化法則をみとめた小倉は、竹中勝男の研究成果を継承しつつ、そこから「更に高次の可能性の領域」を探ろうとしたのである。具体的には、「急激な社会革命によって打開されるというようなことを期待できる情況に置かれていない」（小倉襄二1951：186－187）というなかで、「あらゆる民主的な方途をつくして」（小倉襄二1951：187）、「社会機構の改変」（小倉襄二1951：186）を政治的に獲得する、という道（当時のイギリスで目指された福祉国家が例示されている）であり、そのための理論の構築であった。

ここにおいて、小倉にとっての理論的な課題は、「社会政策的方策」と「社会事業的方策」の二つが「ともに分離できない構造的連関を密接にして」（小倉襄二1951：177）いる、という点を論証することにあった。つづく論文「社会事業の客体領域について」で、この課題に取り組むことになる。

ところで、竹中勝男『社会福祉研究』に対しては、1950年11月に孝橋正一から批判が提起されていた。すなわち、竹中が「社会政策の本質は生産的労働政策であり、社会福祉政策の本質は分配的生活保全政策である。前者は経済というモーティフに於て成立し、後者は社会がモーティフになる」（竹中勝男1950：192）と主張したのに対して、孝橋は、あくまでも「階級的存在であるという点」が「基礎的・本質的な社会的事実であ」り、したがって「生産的労働に関する問題が基礎的・本質的」である、と批判したのである（孝橋正一1950：35）。

孝橋は、1949年に『社会事業の方法（社会事業概論第一分冊）』『社会事業の本質（社会事業概論第二分冊）』（ともに謄写版）を自費出版したのち、1950年に『社会事業の基礎理論』（序は1950年10月、1951年に改訂）を上梓していた。孝橋の考えでは、「社会的諸問題」は「社会問題」と「社会福祉問題」とに分けられ、前者が「基礎的・本質的課題」、後者が「関係的・非本質的課題」であり、「社会政策」は前者に、「社会事業」は後者に対応する方策であった（孝橋正一1950：７－15）。

論文「社会事業の客体領域について」（末尾には1952年２月３日稿とある）で小倉は、孝橋の竹中批判については直接には触れず、孝橋の理論に対して独自の疑問を提起した。それは次の二つである。

> 第一に、“社会における個人”庶民一般（消費者）の社会的障碍に働きかけるのが社会事業であり、“人間に体現する社会”労働者（生産者）にむけられる社会的対策が社会政策であるといってみても、正しくこれら全てのことが階級的社会のなかでの出来事であって、二つの客体領域は絶対的、形而上学的に分離、対立さるべきではないという事の根拠（小倉襄二1952：151、傍点は小倉）
>
> 〔第二に、〕「社会福祉問題」とよばれた社会事業の客体領域について〔中略〕この領域をいかにして資本主義社会の発展法則への合法則的視野においてとらえるのか？ということ（小倉襄二1952：151）

当時の小倉にとっては、「社会政策的方策」と「社会事業的方策」の二つが「ともに分離できない」という点を論証することが理論的な課題であったのであり、その観点から、孝橋の理論が明らかにしようとする「《本質的》・《非本質的》、社会政策・社会事業の客体領域の区別、差異」（小倉襄二1952：151－152）は、優先的な課題ではなかった。そこで小倉は、基本的には孝橋の立論を継承しつつ、さきの二つの疑問を設定したのである。

小倉にとって、第一の疑問に答えつつ、同時に第二の疑問をも解決する鍵となったのが、窮乏化法則であった。「社会福祉の現実的限界」を知らしめたのが窮乏化法則であり、限界を超えて「社会機構の改変」をめざすのであれば、窮乏化法則をよりどころにして対象論を考えるのは、ある意味で当然の成りゆきだった。すなわち、「窮乏化法則をよりどころにして、特に社会事業の客体領域を明かにする〔中略〕それが社会的諸問題のなかの《本質的》対《非本質的》として扱われた二つの客体―問題領域への統合的理解の途」（小倉襄二1952：157）だと考えたのである。孝橋の竹中批判に対して、竹中を弁護するのではなく、竹中と孝橋のいずれをも継承するかたちで両者の止揚を意図していたのだといえる。

1952年11月13日、全国社会福祉協議会連合会の社会事業研究所によって開催された第5回全国社会事業研究発表会において、小倉はこの考えを論題「社会事業の対象について」として発表した。その発表に対して、フロアから、「この位置づけからはなんら建設的、独自の社会事業の目的という明確なものがうかびあがってこない」という批判を受けたという（小倉襄二1953：25、傍点は小倉）[(2)]。この批判に対して、小倉は、「この論理が批判と破壊のものであって建設がうまれない面はたしかにある」と認めたうえで、しかし、いまは、現場の実践者たちにとって「理論的武装として」こうした研究が必要なのではないか、と必要性を書き記している（小倉襄二1953：25）。

この「理論的武装として」という信念は、同じ頃に『大阪社会福祉研究』に寄稿した論文においても示されている。『大阪社会福祉研究』は大阪社会福祉協議会が1952年１月に創刊した月刊誌であり、現場の実践者たちを対象に編集されていた。同誌では第一号から、社会福祉の「本質の正体を明るみに引き出して」「社会福祉事業の正しい姿を確立することを目的」[(3)]にした連載がおこなわれていた。岡村重夫、田村米三郎、竹内愛二、孝橋正一、竹中勝男、雀部猛利らが順に

寄稿し、それぞれの立場から社会福祉（社会事業）の本質規定が試みられた。一般に、社会福祉本質論争とよばれる。

その連載の二巡目で、一巡目の竹中勝男にかわり、小倉は論文「社会事業基礎理論の焦点」を寄稿している。末尾には、1952年11月25日稿、とあり、全国社会事業研究発表会から12日後である。論文の内容はそれまでの考察をくり返したものだが、留意すべきは、末尾の付記にある次の一文である。

> 資本主義社会の、極限的な矛盾にとりくむ社会事業家にとっては、現象の多彩と、虚仮をつらぬいて、冷徹な本質認識が、理論的武装として必要となる。（小倉襄二1952：８）

じつは、同年４月号の『大阪社会福祉研究』誌上に、読者[(4)]からの次のような声が寄せられていた。「本質論は、雑誌の巻頭に位置しながら、おそらく従事者には、なにか第三者の言葉のようにもおもわれ、あまり相手にされてはいない、いわば、知的なアクセサリーにすぎないのではないか」(酒井平1952：38)。ちなみに、同号の「本質論」連載の執筆者は孝橋正一であり、また、小倉による論文「社会事業の客体領域について」も同月に刊行されている。対象論の意義として小倉が示した「理論的武装として」ということばは、このような実践者からの疑問に対する、少壮研究者からの返答であったとも言えよう。

このとき、一つの偶然があった。小倉が論文「社会事業基礎理論の焦点」を寄せた『大阪社会福祉研究』1951年12月号の特集は、「若楠学園経営白書―転倒寸前―小施設の窮乏化を訴える」と題して、ある児童養護施設の経営の窮状を訴えるものであった。そこには、「夜尿を四回も起して」、「就寝と朝食だけが自分の時間」などと題した現場の実践者からの寄稿もある。実践者の「理論的武装として」対象論の理論化をこころざしていた小倉は、この特集をどのように読んだのであろうか。

翌1953年９月、『大阪社会福祉研究』で始められた新シリーズ「社会事業対象論と従事者の態度」に論文を寄せた小倉は、前年の特集「若楠学園」の問題に触れ、次のように記している。

> 従事者の生活をどしどし窮乏化し、暗い犠牲感につきおとす原因と、さまざまの悲惨に彩られた対象者を、無限につくり出す原因とが、絶対に不可分なものであるということが、つきつめたこの問題の実相である。（小倉襄二195

3②：59)

つまり、対象論と従事者論は、その原因においては「不可分」だとする。したがって、現場の実践者たちには、対象者の本質的な理解のための「理論的武装」が求められると同時に、「このでたらめな機構悪への、直視と対決」が必要である、とされた（小倉襄二1953②：62)。このように対象論と従事者論を同根のものとして考える方向性が、発想として、のちに疎外論へといたる。

さて、このように窮乏化法則を鍵とした対象論に到達した小倉は、その後、「恤救規則の背景―日本社会事業分析資料（Ⅰ)」(『人文学』11輯、1953年３月)、「「下層社会」の形成―社会事業対象論の課題として―日本社会事業分析資料（Ⅱ)」(『人文学』16号、1954年９月）といった歴史研究をはさんで、1957年に論文「「窮乏」の現実態について」をまとめる。ここにおいて小倉の学問的関心は、「対象者の本質認識」(小倉襄二1953②：62）から、「窮乏の現実態を摘出してみたい」(小倉襄二1957：35）というところへと変化している。そして、そこで明らかにされた、「ここにあらわれた窮乏のかたちは、ウエッブのいうdestitutionのなかでの、肉体的・精神的頽廃をともなっていた」(小倉襄二1957：59)、という結論が、対象のとらえ方として、のちに疎外論へといたる。

こうして、1963年に小倉は論文「「社会事業対象論」の構成―「疎外論」によるノート」をまとめる。当時、翻訳によって日本に紹介されたばかりの、F．パッペンハイム『近代人の疎外』(岩波書店、1960年)、H．ルフェーブル『疎外と人間』(現代思潮社、1961年)、H．マルクーゼ『初期マルクス研究』(未来社、1961年)、などを用いて、「「疎外論」を作業概念として対象の構成を考える」(小倉襄二1963：39）という問題意識につらぬかれた論文である。

この論文は、直接には、その前年に忠津玉枝（当時、大阪社会事業短期大学助手）が提起した孝橋理論への批判を受けてまとめられている。忠津は、孝橋が「社会的問題」を「経済問題に限定」して、精神的、心理的問題をも「物質的、金銭的解決に置換し得るものであると」している点に疑問を呈し（忠津玉枝1962：23－24)、それら問題に対しては「ソーシャル・ケースワークの技術（および一連の心理的技術、カウンセリング、ガイダンス、心理療法)」(忠津玉枝1962：25)が必要であること、さらに、それら「ソーシャル・ケースワーク的対応を必要とする問題状況は、基本的には資本制社会における（そこには封建制の残存物が混

在する）人間疎外の状況であること」（忠津玉枝1962：49）、などを論じている。

この忠津の指摘を、「的確な孝橋―「対象論」への批判」（小倉襄二1963：26）と位置づけ、くわえて、自身の旧稿「社会事業の客体領域について」（1952年）で提起した孝橋の理論への二つの疑問をあらためて提起し、「疎外論」の検討によって、そのような“疑問”と“批判”を「解明―前進させてみたい」（小倉襄二1963：26）、というのが小倉の問題意識であった。それは小倉にとって、孝橋の仮説を「〈マルクス主義の視覚〉においてふかめようとする試み」（小倉襄二1963：26）であった。

この論文のなかで、小倉は、孝橋の理論に対して向けられる批判を、次のような「期待」として読み替えることによって、議論の展開をはかっている。

> 〈社会科学派〉に対する批判の立場とは、〔中略〕“社会における個人”についての内実に関する具体的な〈説明〉を期待しているというべきなのではないだろうか。（小倉襄二1963：28、傍点は小倉）

孝橋の理論への疑問をいったんは窮乏化法則を鍵に解き明かそうと試みたのであるが、その後、学問的関心を「対象者の本質認識」（1953年）から「窮乏の現実態」（1957年）へと移した小倉にしてみれば、対象者の「内実」についての説明を理論的に希求するのは、自然ながれであった。疎外論は、当時、その説明に有効だと考えられたのである。

さて、ここで重要なのは、1951年から開始された小倉の対象論研究が1963年に疎外論へと帰結した、という点ではない。この後の小倉の対象論の展開をたどるに際して、ここで確認しておくべきことは、この時期の小倉が対象論にこだわりつづけていた、という点、そしてそれが、対象の「内実に関する具体的な〈説明〉」という関心へと帰結した、という点である。

そもそも、なぜ、対象論だったのか。理論的には、孝橋の理論への二つの疑問、という点にあったが、着眼の出発点には、次のような「発想の源発」があった。

> 発想の源発は素朴なものではなかろうか。社会事業論―研究にとっての発想は“民衆の問題をいかにすべきか”“民衆のニード、その解明と対策への密着”ということである。（小倉襄二1958：93）

ここでいう「発想の源発」とは、「論述の発想」、「ふつうに問題意識といわれているものよりもさらに源発的な構想」、「論述へと研究者をつきうごかしてゆく

みがまえ」、「何を中軸の発想として開始されたか」、などの表現でパラフレーズされている（小倉襄二1958：93、傍点は小倉）。この「発想の源発」が、小倉にあっては「“民衆の問題をいかにすべきか”“民衆のニード、その解明と対策への密着”」であったという。これに、のちの回想を重ねてみると、事情が明らかとなる。

> “私”、自分史、それにかさねて“福祉への精神史”といった枠ぐみがあるとすれば、戦後に大河内一男氏が“第二の下層社会”の出現と呼んだ戦後荒廃と窮迫が私たちの直面したものであった。心象において明暗の揺れうごく日々であった。ここからの出発であった。この段階で視、考えたもの、イメージとその言語化、それを手掛かりとする福祉課題へのアプローチという状況であった。〔中略〕理論についての選択にはイメージがつよく作用する。感性とか感覚というレヴェルもある。戦後変革の激動のなかでなにを視、なにを研究の手がかりとするか、私の場合には、理論以前のイメージがまず働いていたと思う。（小倉襄二1996：19）
>
> 〔社会福祉研究所で従事したのは、〕当時の世相、性風俗のひとつパンパンガールと俗称された占領軍がらみの女性たちの実態、手記に直面する仕事でした。故榎本貴志雄氏らと平安病院でのケースごとの面接調査や手記の整理は当時の私にとってはショックと〔後略〕（小倉襄二2005：６－７）

「戦後荒廃」への直面、より直接的には、在学中に従事した「街娼」調査で受けた「ショック」が、当時の小倉を「対象論」へと向かわせた、と考えてよさそうである。(5)

3．対象論の展開

1963年の論文で、対象の「内実に関する具体的な〈説明〉」に学問的関心を移していった小倉は、その後、独自のやり方で、その「内実」を掘り下げていく。以下、1970年代以降の論考のうち、対象論とかかわりの深いものとして、本節では次のものをとりあげる。

小倉襄二『社会保障と人権』（小倉襄二1970）

小倉襄二「"辺境"の視坐―七〇年代へのあゆみのなかで」（小倉襄二1971）

小倉襄二『市民福祉の設計』（小倉襄二1976）

小倉襄二「市民福祉の思想―抵抗論としての仮説」（小倉襄二1980）

小倉襄二『社会状況としての福祉―発想を求めて』（小倉襄二1981）

小倉襄二「福祉には“深層”がある―『官能へのテロル』（矢野龍子）読後」（小倉襄二1993）

小倉襄二『福祉の深層―社会問題研究からのメッセージ』（小倉襄二1996）

小倉襄二「『黄落』・（佐江衆一）の問い―文学と福祉についての仮説」（小倉襄二1996②）

1970年刊の著書『社会保障と人権』の序章の冒頭に、次のようにある。

政治、経済の坐標軸に対して人間の軸を交叉させることが大切だ。社会保障はもっとも切実に人間の生活にかかわる。構造論、制度論の以前に人間の軸から問うべきことが多い。（小倉襄二1970：７）

当時の西欧マルクス主義におけるヒューマニズム（人間主義）の潮流をふまえた立場表明といえる。疎外論については、論文「「社会事業対象論」の構成―「疎外論」によるノート」が著書『社会保障と社会問題』（汐文社、1968年）に収録されたほか、「福祉と疎外論」（小倉襄二1976：58－64)、「マルサスとチャルマーズの時代と思想」（小倉襄二1981：17)、「アノミーと現代の福祉」（小倉襄二1981：226－227)、などにも言及がある。ただし、本稿で着目したいのは疎外論への関心の継続ではなく、対象論の展開である。

その意味で、次の記述に注目したい。

ロマン〔派か？主義か？―筆者〕の残党というようなコトバで、社会福祉の研究者に世代論をみちびきいれるつもりではないが、七〇年代へ入りこむこの現実へのアプローチと主体性論のかかわりはこのさいはっきりさせた方がいいのではないか。まんべんなく目がくばれて、“専門的”に説明がついてそれで済むというような事態ではないだろう。たとえば水俣病について『苦海浄土』として石牟礼道子が現代の語部としてのべたこと。実は、その“非専門的”アプローチが、いかに痛切に人のいのち、人のくらしの重みとそれを侵し、腐蝕させるもの、そして、侵すものの側のメカニズムとそれをびっちりとカバーする体制のかたち、抵抗し、声をあげ、あげようとした人々の

声が途絶する悲愁を描ききったかを知る。まんべんなく目がくばれて、“専門的”に説明がつくなどと思いこむのは、実はなんにもわかっていないことと同様なのだ。（小倉襄二1971：４）

つまり、対象の「内実」を学術的な概念によってとらえることの限界をここで指摘しているのである。この点に、1960年代前半、同じように疎外論を媒介にして孝橋理論の展開を企図した忠津と小倉とのちがいがあったと考えることができないであろうか。すなわち、「人間疎外の状況」を「ソーシャル・ケースワーク的対応」によって対処可能と考えた忠津と、「「疎外論」をふかめながら〔中略〕疎外形態のはげしい変容、複雑な形態を、社会福祉のそれぞれの「方法」に沿って、検証していく仕事が未開拓に残されている」（小倉襄二1963：39）と、疎外状況に対する社会福祉の対処可能性について一定の留保をみせた小倉とのちがいである。

これについて考えを進めるうえで、丸山真男の1979年における次の発言を参照したい。梅本克己をめぐって安藤仁兵衛とおこなった対談での発言である。

伝統的個人主義をいわゆる原子的な個人主義として見れば、全ての人間に備わっている理性というようなものによってくくられてしまう。ですから、啓蒙の個人主義をつきつめていくと類的人間になるんですよ。そういう普遍的理性によってくくられない個、ギリギリの、世界に同じ人間は二人といないという個性の自由は、むしろ、啓蒙的個人主義に抵抗したロマン主義が依拠した「個」です。この西欧的な個人主義に内在する矛盾の問題はぼく自身も解決がつかない。（安藤仁兵衛・丸山真男「梅本克己の思い出」1979年、丸山真男1998：181）[(6)]

ここでの「啓蒙的個人主義」と「ロマン主義」との対比で考えるとすれば、小倉が「対象の本質認識」から対象者の「内実」へと学問的関心を移していった底流には、孝橋の社会事業理論が前提とした「啓蒙的個人主義」の人間観に対する違和感があったといえるのではなかろうか。その際に、小倉は、西欧マルクス主義の人間主義の潮流と共振していたのであるが、その実、「ロマン主義」の人間観への共感が底流にあった、ということである。

引用箇所にあった「ロマンの残党」というアイデンティティは、これをたんなる追懐として読むならば、若い日にふれた新浪漫主義あるいは日本浪漫派への文

学的な嗜好を表明しているのだといえるが、これを「七〇年代へ入りこむこの現実へのアプローチと主体性論のかかわり」にむすびつけて読むならば、むしろ、「啓蒙的個人主義」に対峙する「ロマン主義」への共感を表明しているのだといえる。であればこそ、「“専門的”に説明がつくなどと思いこむのは、実はなんにもわかっていないことと同様」、なのである。(7)

さて、このような対象論のあり方は、次のように「論理や抽象以前からの切りこみ」の必要性へと結びついていった。

> 市民とか、その日常性のなかで、一つ一つの具体化として福祉の主題を考えていくための方法があるにちがいない。論理や抽象以前からの切りこみである。たとえば、重い障害をもった子どもをかかえた親たちの集い、話しあいがある。私もそこに立ちあう機会がある。あれこれの障害児のためのねがいや条件づくりをめざす提言など運動への展望が語られる。親たちの前には、それをつづった文書や資料もならべられている。行政の側や、専門の研究者からの助言もあるにちがいない。そうした話しあいの進行のなかで、ふと重い沈黙やすべてが凝結したような時間がその場を支配することがある。その時間の深さとずしんとこたえるもののまえには、いっさいの助言、提言もむなしいということがある。このたちすくんだような時間の凝結のなかで、親たちがみつめているものは、それぞれの親たちの生活の流れとその全重量と、障害をもつ子どもたちの生そのものをかさねあわせているにちがいない、と私は想うことにしている。そのことを親たちは、もし、私たちが衰え果てたり死んでしまったらこの子どもたちはどうなるのでしようかなどといってみる。それは、深く重いものの一端をこうして語ってみせてくれたにすぎないのである。ひたすらに、戦後状況のなかで、福祉についての制度、システム、サービスについての論理と実践が構築されてきた。そして、それらは、一定の到達と成熟を獲得した。私たちの当面の論理も実践もこの事実との相関で語る外ない。そうした理解と、その理解をうら打ちする事実にもかかわらず、私はここにたとえばというかたちでとりあげたように親たちが、その生と死のはざまに障害児の実存をかさねあわせた状況にあらためてたちかえってみる必要を痛感している。(小倉襄二1980：161－162)

ふとした「沈黙」のなかに「ずしんとこたえるもの」「深く重いもの」を感受

し、そこに「時間の深さ」を想像する、そのような「論理や抽象以前からの切りこみ」の必要性をここで説いている。「論理や抽象以前」とは、つまり、学術的な概念によって整序することが難しいということであり、それゆえに、「専門の研究者」からの「いっさいの助言、提言もむなしい」ものとなる。

とはいえ、専門的な助言や提言を無意味なものとして切り捨てるのではない。社会福祉の領域での研究や実践の積み重ねの「一定の到達と成熟」はみとめる。小倉が喚起しようとしているのは、そのような積み重ねによって得られた人間理解の限界を自覚することの必要性である。[(8)]

しかし、たとえば重い障害をもった子どもと暮らす親たちによって語られる切実な声でさえも、じつは、それら人たちの「深く重いものの一端」を語っているにすぎないのであれば、私たちはその「深く重いもの」をどのようにして知り得るのか。専門的な立場の限界を超えたものとしてあきらめるべきなのか。小倉は次のように考えた。

> 福祉の主題がすぐれて人間のねがいにかかわるとするならば私は人間の生き方、生の意味を問う素材はその作業や仮説にいくらでも援用したらいいと考える。(小倉襄二1981：100)
>
> こういった優れた作品なり映像から改めて、現代における可能性や、人間というものの持っている非人間的状況にかかわる部分についての、想像力による人間の復権への指向というものを、はかっていく必要があると痛感しております。(小倉襄二1996：137)

つまり、考えるための「素材」を小説や映画など学術以外の領域に求めて、「想像力」を培う、という方法の必要性を説いている。それは、学術的な接近をあきらめる、という意味ではない。学術的な営為としてなされる仮説設定に際して、その素材を小説や映画などの領域にも求める、という手法である。

たとえば、小倉は、高橋たか子による次の文章を、「不気味だが至言として忘れることはできない」(小倉襄二1993：12) ものとして言及している。「いいことでもわるいことでも、人間のいちばん核心のところは、他人の眼にも届かないものであるらしい。いいことだから隠す、わるいことだから隠す、ということではかならずしもなくて、人間のなかの本当という部分は、うっかり他人が見れば、その眼がちりちりに爛れてしまうような、そんな性質のものなのだ、と私は思っ

ている。」（高橋たか子1977：40）

社会福祉における人間理解は「わかったつもり」で展開していくが、じつは、「福祉の領域では高橋たか子氏のコトバはほとんどわかっていない、わかろうとしないままの通過なのではないか」（小倉襄二1996：24）、というのである。そのような人間理解を学術的な概念体系のなかに位置づけることを求めているのではない。小倉が求めるのは、研究や実践の積み重ねによって得られた人間理解の限界を自覚する必要性であり、「論理や抽象以前からの切りこみ」によってその限界を超える可能性である。

しかし、そもそも「こうした文脈とは無縁なところに福祉の専門過程の了解が成立している」（小倉襄二1996：61）とすれば、なぜ、あえてそのような人間理解に思いを致す必要があるのか。この点に、小倉における対象論の展開の核心がある。

なぜ、「論理や抽象以前からの切りこみ」が必要なのか、なぜ、あえて「うっかり他人が見れば、その眼がちりちりに爛れてしまうような」（高橋たか子）部分を知ることが必要なのか。それは、現場の実践者たちがそこに直面しているから、である。

> 文学作品には“虚実皮膜の間”ということがある。そこを読みとっている。じつは、福祉の現場はこの虚と実の皮膜のあいだを視ていると思う。（小倉襄二1996②：175）
>
> 貨幣的ニードと非貨幣的ニード、市場型福祉サービス、これもちりばめられたコトバの虚構性は、このたった一つの事例によって色褪せていく。コトバと現実の狭間になすべきことをかかえたワーカーの抑圧感やギャップを目新しいコトバで埋めることはできない。（小倉襄二1996：37）

現場の実践者たちは、「虚と実の皮膜のあいだ」に直面し、「コトバと現実の狭間」を手探りで歩いている、小倉はそのように考えたのである。戦後荒廃を少壮研究者として真摯に見据えようとしたところに小倉にとっての対象論の出発点があり、現場の実践者たちの心情に向き合い、彼ら／彼女らの煩悶を真摯に受けとめようとしたところに対象論の展開があった、といえる。

その間に重要な変化も見られる。現場の実践者たちにとっての「理論的武装」を説く姿勢から、「論理や抽象以前からの切りこみ」を説く姿勢への変化である。

つまり、対象を把握するための理論、という意味での対象論から、対象を学術的な概念によっては整序しつくせないことを承認し、なおかつ、その論理以前のものを直視することを学術的な立場から手放さない、という対象論へと、対象論の意味合いが深化しているのである。

また、かりに社会福祉研究が〈反省的実践家〉（ドナルド・ショーン[(9)]）、〈臨床の知〉（中村雄二郎[(10)]）などの概念から実践のあり方を学ぼうとするならば、科学的合理主義の限界を明示した小倉の対象論は、その理論的根拠としての意義を持ち得る。そう考えるならば、「理論的武装」から「論理や抽象以前」への変化は、じつは実践者たちにとって真によりどころとなり得る理論を希求するという点では連続した対象論であり、逆に、それゆえにこそ対象論としての深化が必然であった、ともいえる。

4．おわりに

黒木利克は『社会事業現代化論』（1958年）のなかで、憲法25条を、「人々が、社会連帯（solidarite sociale）の精神に基く当為（Sollen）を、人々の協同体としての国家の施策を通じて実践するという関係が、法律的表現によって明らかにされているのである」（黒木利克1958：34）、と説いた。これに対して、小倉は、「「人々の協同体としての国家」といったあいまいなことではなくて〈主権在民〉という点に中枢がある」（小倉襄二1958：95）、と批判した。

それを「人々の協同体としての国家」と表すとしても、また、それを〈社会〉という概念で表すとしても、その成員に共同性を求めることは、それ自体としては仮構である。現実の混沌を前にして、たとえば「連帯」などの理念によって共同性の担保が図られる。竹中勝男が社会福祉を「人が社会生活を営む上の共同の福祉を共同の社会的基盤に於て確保しようとする行為、施設、組織、方策の総称」だと考えたのも、仮構としての共同性を前提とした理論であった（石井洗二2003：13－14）。

これに対して、嶋田啓一郎は、「協同社会そのものの連帯性が主体となって、超階級的に集団の生活保全のための国家的処置を展開する」ところに社会保障が成立するという仮説を批判し、そこから自身の社会保障研究を出発させた（石井洗二2004：30－32）。その一方で信仰と社会科学との関係を自問しつづけ、後年、

カントに依拠して、「協同体的な交わりのなかの個人」という人間観に到達した(石井洗二2004：33－35)。いわば、共同性を〈社会〉に仮託することなく、より小さな人間集団の共同性に社会福祉実践の本質を希求したのが、嶋田の理論であった。

キリスト者嶋田にとって、その人間観は社会福祉実践がめざすべき価値として欠くべからざる指針であった。しかしそこには、一番ヶ瀬康子によって「日本の場合は、科学性というか、客観性を意識して身につけないと、結果的には情緒的で底の浅いものになったり、あるいは一番必要なところを忘れたりする」(一番ヶ瀬康子1982：158)、と疑問が呈されたように、〈社会〉を科学的に研究する営みとの折り合いをどのようにつけていくのか、という課題が残される。また、小倉による「福祉の過程はとにかく人間の主題にかたく寄り添うことになる。私たちはこの修羅のようなものをしかと視た方がいい」(小倉襄二1996：25)、という指摘に思いを致すとき、嶋田の人間観が精緻化するほどに、それと現実との懸隔に嘆息する実践者を想起せざるを得ない。

ここにおいて、小倉の対象論のもつ重要性が明らかとなる。すなわち、小倉の対象論がわれわれに教えるのは、実践者たちが日々直面している混沌と修羅から目をそらさない覚悟と、それを見据えるために対象の内奥を「論理や抽象以前からの切りこみ」によって探る努力の必要性である。

嶋田にとって「協同体的な交わりのなかの個人」とは、共同体の存在を措定したうえで成員に共同性を求める、というものではなかった。共同体の存在を所与の前提とあえてせず、なおかつ〈共同〉へ向かう能動的な参加を凝視する、という点にその理論の独自性があった(石井洗二2004：36)。これを小倉の対象論にかかわらせていうと、〈共同〉へ向かう能動的な参加を、抽象的な価値や理念としてではなく、「人間の主題」として考えることができるかどうか、という点が課題として浮き上がってくる。それは、社会福祉理論のみならず、現在の社会科学に突きつけられている先端的な課題といってよいだろう。

注

(1) のちに、「この著作〔＝竹中勝男『社会福祉研究』〕は、私が校正を担当した」(小倉襄二1992：

121）と記している。

(2) 報告に対する「批判」の背景には、つぎのような当時の学界の状況があったと思われる。「御存知のように昭和十三年頃から大河内一男、風早八十二、菊池勇夫、後藤清先生、その他ずっと続きまして日本の社会福祉理論の基礎作りをするわけですね。ただ、おおむね労働政策やなんかから来たもんだから、どうそこから自立するかという課題があった。三十四～五年まで続いたかな。そう六十年安保位まで続きました。六十年安保の時なんか皆国会から帰ってきて十二時頃までね、大河内理論からどうしたら社会福祉が自立するかなんて力んでいたもんですよ」（吉田久一1985：75－76）。そのようななかで、小倉の報告をまとめた論文「社会事業の対象について―対象の位置」は、当時「注目された論文」であったと、おなじく吉田久一が記している（吉田久一1974：311）。

(3)『大阪社会福祉研究』１巻１号、連載に際しての「編集室」からの説明より。

(4) 寄稿者の所属は「東京都上宮教会療養所」と記されている（酒井平1952）。

(5) これにくわえて、第149回関西社会事業思想史研究会（2007年１月）で筆者が「小倉襄二先生の《対象論》から学ぶこと」と題して報告したおりに、ご本人から、《論文「低所得層の「停滞的」生存について―未解放部落における実現を中心として」（日本社会福祉学会編『日本の貧困―ボーダー・ライン階層の研究』有斐閣、1958年）の作成過程でおこなった実地調査での体験が対象論の形成に大きな影響をもたらしたように思う》、とのご指摘をいただいた。

(6) 苅部直は、この発言を、丸山が、理想の姿としての「主体」よりも、あるがままの「自我」に視線を移すなかで、「「近代」の政治原理における、ありのままの個人と、理性を働かせる「主体」がおりなす「人間仲間」との二つの層が、自我の内部での「理性」と「個」の分裂へと折り返した形で、とらえなおされてゆく」過程における発言として位置づけている（苅部直2006：191－193）。

(7) 同じ座談会のなかで、丸山真男は次のようにも語っている。「ぼくの中には、人間のギリギリの生き方というようなものは学問として対象化できないし、文字にさえならないのではないかという感じがいつもあるんです」（丸山真男1998：184）。

(8) この点について、別の論考では「けじめ」として記している。「福祉関係の人間理解にとっての限界があり、そういうものでやれるかどうかということについては、若干別問題なんです。その点で、福祉のそういう限界、あるいはけじめがなければいけないと私は思っています。／専門の立場と言いますけれど、自分のフレームや技術で人間の課題を扱うときに思い上がりと

いうか、専門的な傲慢さは私はいけないと思います。この微妙な兼ね合いなんです。だから、やれること・やれないことのけじめ、そして相手の人たちの持っている自己解決の可能性に対して配慮をし、その可能性や潜在力を大切にすること、そして、アドバイスをする、判断の素材を提供するという限度があるんです」（小倉襄二1996：57、／は改行）。

(9)〈反省的実践家〉という概念が提起された理由として、次のように述べられている。「次第に我々は、複雑性、不確実性、不安定さ、独自性、価値葛藤という現象を抱える現実の実践の重要性に気づいてきたのである。それらは、「技術的合理性」のモデルに適合しないものである」（ドナルド・ショーン2001：56）。

(10)〈臨床の知〉の特徴は、次のように述べられている。「このような臨床の知は、科学の知が主として仮説と演繹的推理と実験の反復から成り立っているのに対して、直感と経験と類推の積み重ねから成り立っているので、そこにおいてはとくに、経験が大きな働きをし、また大きな意味をもっている」（中村雄二郎1992：136）。

参考文献

石井洗二2003：石井洗二「竹中勝男の社会福祉理論における共同性の考察」『四国学院論集』110号、四国学院文化学会、2003年３月

石井洗二2004：石井洗二「嶋田啓一郎の社会福祉理論における共同性の考察」『四国学院論集』113号、四国学院文化学会、2004年３月

一番ヶ瀬康子1982：嶋田啓一郎・一番ヶ瀬康子・仲村優一「国際社会における日本の社会福祉の課題」『社会福祉研究』30号、1982年４月

小倉襄二1951：小倉襄二「書評・竹中勝男教授「社会福祉研究」附―社会福祉の現実的限界について」『人文学』４輯、同志社大学人文学会、1951年１月

小倉襄二1952：小倉襄二「社会事業の客体領域について」『人文学』７輯、同志社大学人文学会、1952年４月

小倉襄二1952②：小倉襄二「社会事業基礎理論の焦点」『大阪社会福祉研究』１巻12号、大阪社会福祉協議会、1952年12月

小倉襄二1953：小倉襄二「社会事業の対象について―対象の位置」『社会事業』36巻２・３号、1953年３月

小倉襄二1953②：小倉襄二「社会事業対象論と従事者の態度―とくに対象論と従事者の対決」

『大阪社会福祉研究』２巻８・９号、大阪社会福祉協議会、1953年９月
小倉襄二1957：小倉襄二「「窮乏」の現実態について―公的扶助と低所得階層」『人文学』30号、同志社大学人文学会、1957年６月
小倉襄二1958：小倉襄二「書評・黒木利克著「日本社会事業現代化論」―発想と方法について」『人文学』39号、同志社大学人文学会、1958年12月
小倉襄二1963：小倉襄二「「社会福祉対象論」の構成―「疎外論」によるノート」『人文学』66号、同志社大学人文学会、1963年３月
小倉襄二1970：小倉襄二『社会保障と人権』汐文社、1970年
小倉襄二1971：小倉襄二「“辺境”の視坐―七〇年代へのあゆみのなかで」『地域福祉』９巻１号、1971年１月
小倉襄二1976：小倉襄二『市民福祉の設計』小学館、1976年
小倉襄二1980：小倉襄二「市民福祉の思想―抵抗論としての仮説」嶋田啓一郎編『社会福祉の思想と理論』ミネルヴァ書房、1980年
小倉襄二1981：小倉襄二『社会状況としての福祉―発想を求めて』法律文化社、1981年
小倉襄二1992：「竹中勝男先生・私の追憶のなかで―“同志社派”の検証として」『同志社時報』93号、1992年３月
小倉襄二1993：小倉襄二「福祉には“深層”がある―『官能へのテロル』（矢野龍子）読後」『洛和会会報・らくわ』27号、洛和会、1993年７月
小倉襄二1996：小倉襄二『福祉の深層―社会問題研究からのメッセージ』法律文化社、1996年
小倉襄二1996②：小倉襄二「『黄落』・（佐江衆一）の問い―文学と福祉についての仮説」『評論・社会科学』54号、同志社大学人文学会、1996年３月
小倉襄二2005：小倉襄二「“自分史”という回路から」『橡』44号、セルフサポートセンター東樹、2005年４月
苅部直2006：苅部直『丸山眞男』岩波書店、2006年
黒木利克1958：黒木利克『日本社会事業現代化論』全国社会福祉協議会、1958年、『戦後社会福祉基本文献集13』日本図書センター、2001年
孝橋正一1950：孝橋正一『社会事業の基礎理論』（大阪）社会事業研究会、1950年、『戦後社会福祉基本文献集６』日本図書センター、2000年
孝橋正一1950②：孝橋正一「顛倒した社会福祉体系―竹中教授の“社会福祉”概念の批判」『社会事業』33巻11号、1950年11月

酒井平1952：酒井平「編集室えの手紙」『大阪社会福祉研究』１巻４号、大阪社会福祉協議会、1952年４月

高橋たか子1977：高橋たか子『記憶の冥さ』人文書院、1977年

竹中勝男1950：竹中勝男『社会福祉研究』関書院、1950年、『戦後社会福祉基本文献集２』日本図書センター、2000年

忠津玉枝1962：忠津玉枝「ソーシャル・ケースワーク論の検討―人間性の科学への方向を求めて」『社会問題研究』12巻２・３号、大阪社会事業短期大学社会問題研究会、1962年８月

ドナルド・ショーン2001：ドナルド・ショーン／佐藤学・秋田喜代美訳『専門家の知恵』ゆるみ出版、2001年（Donald A. Schön, *The Reflective Practitioner*, Basic Books, 1983）

永岡正己1998：永岡正己「書評・小倉襄二著『福祉の深層』」『同志社社会福祉学』12号、同志社大学社会福祉学会、1998年12月

中村雄二郎1992：中村雄二郎『臨床の知とは何か』岩波書店、1992年

丸山真男1998：『丸山眞男座談８』岩波書店、1998年

吉田久一1974：吉田久一『社会事業理論の歴史』一粒社、1974年

吉田久一1985：岡村重夫・吉田久一「学会創立時の学問状況と想い出の人々」『社会福祉学』25巻２号、1985年３月